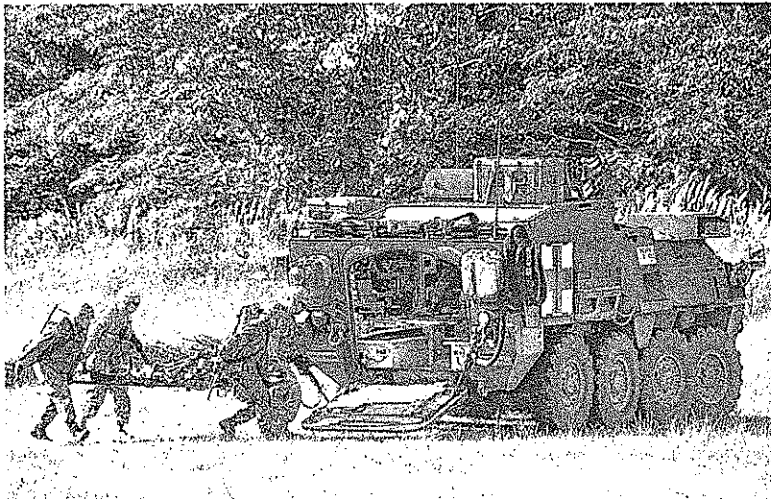


「撃て」と命じるのか

9/20
福井



銃に撃たれたと想定した負傷者を米軍の装甲車に搬送する陸自隊員と米兵＝15日午後、宮城県の上自衛隊王城寺原演習場

自衛隊幹部ら リスク議論不十分 重責くすぶる不満

自衛隊の活動を大幅に広げる安全保障関連法が成立した。「いよいよ」と緊張感を漂わせる自衛官がいる一方で、危険な任務で「部下に『撃て』と命じる局面がくるのか」と漏らす幹部も。現場のリスクが十分に議論されなかったことへの不満や、反対世論の強さへの懸念もくすぶる。

「検討作業は（これまで）は『頭の体操』。いよいよという感じだ」。自衛隊幹部は語った。防衛省と自衛隊内では、新たな任務に対応する訓練や装備、部隊編成の具体的な検討に入る。別の隊員は「やるべきことは覚悟していろいろある」と表情を引き締める。

15日、宮城県の陸上自衛隊王城寺原演習場で日米共同訓練が行われた。機関銃を撃ちながら前進する隊員のうち1人が突然倒れる。敵からの銃撃で負傷したとの設定。隊員は米陸軍の装甲車に収容され、現場を離れた。

法律で集団的自衛権の行使が可能になり、日米同盟はより緊密化して、こうした場面も現実味を増してゆく。弾薬の提供を可能にする後方支援、任務を拡大する国連平和

維持活動（PKO）……。ある隊員は「リスクが増すのは当たり前だと断言する。しかし、政府は隊員のリスク増大を認めることはなかった。」

2005年12月、イラクで活動中の陸自の車両がデモ隊から投石され、ミラーが壊された。隊員は周囲の群衆の中に銃を持っていてる人を発見。緊迫感が一気に高まる。陸自がまとめた内部報告書「イラク復興支援活動行動史」の一節だ。イラク派遣では「非戦闘地域」での任務だったが、新法下ではより前線に近い場所での任務があり得ると野党は指摘していた。

ある幹部は、武装集団に襲われた国連要員らを救出する「駆け付け警護」と治安維持

任務の危険性が高いと説明。「戦國になれば、一瞬の判断の遅れで自分だけでなく部下が一気に死ぬとして『撃て』との命令を自らが出す可能性を語った。

別の幹部は「われわれの命が強かったことを心配する隊員も。国民から『頑張ってるぞ』と言われて誇り出されたりも。『反対』の大合唱の中で任務に就くのは正しくないと本音を吐露した。

別の幹部は「われわれの命が強いと説明。戦國になれば、一瞬の判断の遅れで自分だけでなく部下が一気に死ぬとして『撃て』との命令を自らが出す可能性を語った。

別の幹部は「われわれの命が強いと説明。戦國になれば、一瞬の判断の遅れで自分だけでなく部下が一気に死ぬとして『撃て』との命令を自らが出す可能性を語った。